コゾウと先輩

片岡　京子

ネネは生まれついてのくせっ毛だった。
生まれたときには産道にはさまれてややつぶれぎみの頭が、もうモウモウと黒く渦巻いていた。
つぶれた顔と頭は時間とともに丸くなっていったが、頭のモウモウはいっこうにモウモウとしたままで、長ずるにつけモウモウはますます増していった。くしが通らないのは言うまでもないが、ブラシもからきしなのである。
それでは、このモウモウとした頭をなにでほごすかというと「箸」を使う。プラスチック製のなるたけツルっとした長くて太い箸で、モウモウの絡まりや固まりをほごすのである。
これは今でも語り草になっているのだが、冬に、寒いので肩まで伸びた髪を切らずにいたら、こたつで横になっていたネネのモウモウがいつのまにか目の詰まった毛足の長いじゅうたんにがっちりと絡んで取れなくなった。
ネネの「助けてぇ」の声にばあちゃんが駆けつけ「どしたっ？」と必死の形相で叫んだあとに事情を知って腹を抱えて笑ったのなんの。傑作だから皆を呼びに行った。呼ばれたかあさんとじいちゃんも腹を抱えて笑った。皆に笑われてはじめは怒っていたネネも、そのうちつられて笑いだした。
ところが、三人がいくら代わるがわる引っぱっても、ネネの絡んだ髪はじゅうたんに食いつかれたまま外れない。そのうちネネは「痛い、痛い」と言うし、しょうがないから、じいちゃんが布切りばさみの大きいのを持ってきて、ひと思いにばっさりやった。

ネネはじゅうたんに残ったモウモウの残骸を見て泣きだしてしまった。じいちゃんは謝ったが、かあさんはかえってネネを叱った。
「おじいちゃんに助けてもらっておいて、この子はなに泣いてんの！」
それ以来、ネネは今にいたるまで髪を伸ばしたことがない。
「いっそ長くしてしばっておいたほうが安全なのに」
とかあさんは言うのだけれど、あのときのじゅうたんに食いつかれたような感覚は――じゅうたんからしたら「ネネのモウモウに食いつかれたン！」って言うかもしれないけれど――生涯忘れられない体験だったのだ。そして、そんな体験はこんりんざい、もう二度としたくないのである。

＊

ネネは中学生になって恋をした。相手は同じバスケット部の先輩である。
ネネはくりくりしたショートカットなのと、ちょこちょことすばしっこいので、部のみんなから「コゾウ」と呼ばれている。だけど、その三年の鈴木先輩だけはちゃんと「公野《こうの》さん」と苗字を「さん付け」で呼んでくれて、ほかの女子部員たちに接するのと同じように、ネネを「女の子扱い」してくれるのだ。その紳士的態度と、眼鏡のブリッジを中指でちょいとあげる知的な仕草に、ネネはコロ

ッとまいってしまった。
だから、いつもはちょこまかとうるさく動いて、みんなから突っ込まれたり頭をはたかれたりしていても、先輩のいるところでは急に大人しくなって、うつむいたりクネクネしたり――とにかく、先輩に「コゾウ」なんてところを見せないようにしていた。先輩にはいつでも「女子の公野さん」と思っていてもらいたかったのだ。
先輩といっしょに「かんなみフェスティバル」に行って「巨大パエリア」を食べるのがネネのもっかの夢である。
九月も終わりだというのに、いぜんとして真夏日が続いていた。この日も先輩がいるのでいつものごとく大人しくしゃなりしゃなりとしていたら、ボールが後ろからおしりに当たった。ふり向くと男子部員たちがげらげら笑っている。
ぬっ。わざとぶつけたな。だけど、鈴木先輩がいるので怒るに怒れない。ネネはとりあえずボールを投げ返した。すると、それを受け取った男子部員が鈴木先輩にボールをパスしながら、
「ダメッすよォ、先輩。コゾウに俺らがやったって思われたじゃないッすかァ」
「フフン。だってコゾウのヤツ、いつもふにゃふにゃしてるから気合を入れてやったんだ」
鈴木先輩が受け止めたボールをバウンドさせながら言った。
え？

もしかして先輩もあたしのこと「コゾウ」って言ってたの？
それにいつも気合いが入ってないって。
あたし、先輩の前だから、一生懸命、女の子らしく女の子らしくってがんばってたのに……。
ネネは今までやってたことがまるで無意味だったと知って、ガックリきてしまった。
だけど、とった行動はまったくその反対だった。
ネネは鈴木先輩のところまでダッシュすると、まるで、今までの分を取り返すかのように、素早く鈴木先輩のバウンドするボールをカットした。ネネは両手にしっかりボールを押さえて、にやりと笑う。そして、そのままワンバウンドして、シュートした。ボールはきれいな弧を描いてゴールネットに吸い込まれていった。
「先輩なにしてんの？　気合いが入ってないんじゃないの？」
ネネはそう言って、ボールを取りに行く。
「公野さん、調子でてきたじゃん」
鈴木先輩もボールを奪いに走る。
いまさら「公野さん」なんて言ったって遅いんだから……。
ネネの両目に涙が玉のようにふくれていく。前がよく見えない。シューズが床をダンと鳴らすたびに、玉のような涙がその衝撃でポロッとこぼれた。ネネはボールを越して……ゴールも越して……体育館か

ら走り去った。
後ろで、鈴木先輩が、
「おいッ。――公野ッ！」
って叫ぶのが聞こえた。

＊

ウェアのまま家に帰って自分の部屋でワンワン泣いていると、じいちゃんとばあちゃんが血相を変えて飛んできた。
「ネネっ。どしたっ？」
ネネが涙でぬれた目を両の手の甲でこすりながら、どうしたもこうしたもない、失恋しただけだと説明すると、
「なぬぅ？　うちのかわいいネネを？　どこのどいつだ？」
じいちゃんがすっかり憤慨する。
「いいの。どうせあたしなんていくら女の子ぶったってコゾウなんだもん」
そこへかあさんが呼びにきた。

「ネネ。バスケット部の皆さんが来てる。あんた、カバンも制服も学校に置いたまま帰ってきちゃったんだって？」
　ああ、そうだった。
「あ、うん。ちょっと急に気分が悪くなっちゃって……。だから悪いけど――」
　帰ってもらってと言おうとしたら、かあさんの後ろから皆がすでにどやどやと、
「おーっ、コゾウ、だいじょうぶかぁ」
　と口々に声を発しながらついてきた。鈴木先輩もいた。
「どうしたんだよ、急に――」
「はら具合でも悪いんかあ」
　男子部員はめいめい好きなようにあぐらをかいて座りこむ。
　女子部員は全員、ネネが鈴木先輩のことを好きなのは知っているので、よけいなことは言わずにうなずいて、「制服とカバン持ってきたからね……」とだけ言った。ネネもウンウンうなずいて、ありがと、とだけ言った。
「公野さん、俺、ちょっとふざけ過ぎたかもしれない。……ゴメン」
　もう、ネネはこれまでのネネではなくなった。だから、こんな先輩の謝罪を聞いても、本当はうなずきたいんだけど、ことさら平気ぶって、

「先輩なに言ってんの？　あたしはおじいちゃんと約束があったの思いだしただけだよ？」
じいちゃんがしきりにこそこそと、「こいつか？」「こいつか？」と訊いてくる。ネネがそれを無視していると、突然、縁側越しのこじんまりした庭からグルウ、グルウという鳴き声が聞こえた。
「鳩だい！」
じいちゃんは短くそう叫び、くつ脱ぎ石のうえの突っかけを履いて庭によろよろとでた。ばあちゃんもそのあとを追っかける。
「おじいさん、ダメだよ」
「なにがダメなもんか」
物干し台の土台やら植木鉢やらに白と黒の油絵の具をいい具合にこねたようなフンがくっついていた。なかには日がだいぶ経ってすっかり乾燥しているようなものまである。それで皆、じいちゃんは庭にフンをする鳩を追っ払いに行ったのだと思った。ところがじいちゃんはよろよろと鳩を追いながら両手を前に突きだして、締まらない声で、
「これがうまいんだ……」
と言う。皆、聞き違いかと思ったが、ばあさんが後ろからおっとり刀で、
「ダメったらダメだよ」
と必死で止めていた。

「なにを。今日こそ捕まえて、皆さんに食べていただこうよ」
皆それを聞いた瞬間、
「それじゃ、お大事に」
と言って立ちあがった。
クモの子を散らすように皆が帰ったあと、ひとり残っていた鈴木先輩にネネは、
「あ、あんなのウソですから。結局いつもハト捕まえられないし……」
と、必死の言いわけをする。
「やっぱりいつもやってるんだ、あんなこと」
先輩はクククと鳩みたいな声で笑ったあと、
「それじゃ俺も帰るから。――明日、ちゃんと部活に来いよ」
と、ネネの天パー頭をクシュクシュとかき回して、帰った。
ネネはそれだけでポーッとなってしまい、さっきまで「失恋したぁ」と、泣きの涙だったことなどとんと忘れた。
ところが先輩を玄関先に見送って、ふと廊下の壁にさがっている鏡が目に入ると、さっき先輩がクシュクシュっとした髪がおかしな具合におっ立っている。そうなるとぽーッとした気分も吹っ飛んでしまい、『一万円ぐらいかかるけど、やっぱり美容院に行って縮毛矯正をしてもらうしかないな』と冷静に

考えるのであった。
冷静なのはかあさんも同様で、
「ああよかった、帰ってくれて。晩ごはん食べさすことになったら、あんなに大勢どうしようかと思った。って言っても、どうせカレーだけどね」
と笑った。そのきげんの良さにつけ込んで、ネネはすかさず足りない分の五千円をかあさんにカンパしてもらい、さっそく、その日のうちに美容院へ行った。
翌日、まっすぐになった髪をなんて言われるかとドキドキしながら登校すると、そのことはちっとも話題にのぼらず、ただ、ネネには「コゾウ」以外に新しいあだ名がついていて、さっそくそれで呼ばれた。
「ハトヤ！」

（了）

コゾウと先輩（せんぱい）

2023 年 10 月 28 日　発行

著者　片岡（かたおか） 京子（きょうこ）

町制施行 60 周年・かんなみ知恵の和館 10 周年記念事業冊子
発行　函南町教育委員会
製本　函南町教育委員会生涯学習課（函南町立図書館）
電話番号　055-979-8700
419-0122　静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。
（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の
第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。
作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるもの
とします（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること）。ただし、当館は
著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。

ネネはくせっ毛だった。伸ばしていると絡んでしまうので、くりくりのショートカットにしていて、バスケット部のみんなからは「コゾウ」と呼ばれている。中学生のネネの恋の行方は思わぬ方向へ……。